

五、社会人時代（一次）

昭和三十六年四月家具のデパートスナムラに入社する。いよいよ社会に出て将来の始まり。どうなるかさっぱりわからない。仕事の一日目は、男子全員はトラックで昨日売れた家具を都内は無料配達の助手を勤める。女子は店内の売り子の研修からスタート。女子は主に都内から採用だが数名は茨城出身もいた。男子は北は青森、秋田、静岡、長野、福井、徳島、鹿児島出身がいた。二日目からは自分だけ内勤になる。テーブル類の担当になるが、七歳位年上の赤井先輩ベテラン美人の助手となる。主に食卓のテーブル担当となる。最初は常務の指導で仕入検品、値段付け、品物の用意をする。毎日が忙しい会社だった。家具が毎日よく売れる。家具が毎日こんなに売れるのはびっくり。なるほど給料いい訳だ。土曜日、日曜日はてんでこ舞いで昼食も喰べる暇なし。一日の売上が五百万円以上売れると大入袋が出て給料に加算される。日曜日は一千万円以上で大入袋二つが加算される。経済の途上中とは言え家具屋でこんなに売上されるのに驚いた。一日があつという間に過ぎてしまう。こんなに売れる要因は、ただ経済が途上だから売れるのではなかった。品物の仕入は日本の家具生産地から品物の良い物だけを産地直送で朝には倉庫にトラックが到着している。生産者の担当とスナムラの配送の社員でトラックからおろし、全部の製品を並べて検品を入念に合格品だけ現金で支払う。毎月買っているので不合格がほとんど出ない状態になっていた。生産地は九州福岡の大川の家具、広島は府中の家具、徳島は福島の鏡台、静岡の鏡台等。全国家具の有名所からいい物を大量に仕入れその場で現金支払いで買う方法で、店に出して販売価格は全ての商品が一割二部三厘掛けで値札をつける。それを都内無料配達するから。いい品物が大変安い為売れる。自分の担当のテーブルの化粧板の柄を売れずじ順に発注するが今までの売れたデータが重要で、運送会社の十一トン車で満杯で購入するので神経を使う。大量の検品も大変です。一枚一枚の反りと裏側のエッチが出てないか全数やるので時間も掛る。東洋プライウッド社の化粧板を初めて大量に発注したが一回目は全数返品となる。自分は常務に教えられた通り、相手の担当者に反りとエッチの出たのは駄目と説明。全数また大型トラックに積み直し。この東洋プライウッド社は一流の大会社でアメリカ

カ向けが主要輸出国だったから二度目の納品は全てが合格品ですが一流会社はたいしたものだと感心した。これも合格品はすぐ現金支払いです。自分は責任重大です。当社の配送の運転手は中途採用者もいた。野球部もあつたり、休みには旅行に行ったり、慰安旅行も会社全員で一回目は湯河原温泉の高級旅館へ。二回目は熱海温泉大野屋。三回日も熱海温泉のシーサイドホテル。楽しい思い出だった。仕事以外の普段は各県から先輩達皆んない人達だった。県外からの社員は全員寮生活の為食事は朝昼夜と有り食事の心配はないが休みの日食事はない為、先輩に教えられたのは握り寿司をカウンターで食べる。東京に出て初めて。こんなにうまいの初めての経験で以後やみつきになる。その後は給料の半分位は寿司の支払いで使っていた。給料日になると支払いのためカウンターで食べるのが月一の楽しみだった。会社の近くの三好寿司、この御主人にスカウトされるが、まちがえば今頃寿司屋になっていたかも。ところが二年目の夏休み事件を起こす。昭和三十七年夏休み三日間ある。自転車屋さんからサイクリング自転車借りて、田舎の徳島に帰ることにする。二日間で徳島に帰って一日で汽車で東京に帰る予定で、朝早く六時頃、品川区荏原の会社寮をスタート。中原街道から東京寄りの多摩川沿いに八王子へ着いたのは昼頃で高尾の手前で昼食をする。更に高尾の大垂水峠を越えて山梨県に入る。この頃中央高速道路が作り始めていた。自分が走っている国道二〇号線はまだ舗装されていない。道路脇には民家の前にはポンプが有り自由に水が飲める。途中四方津駅でひと休み。すぐ大月へ向かう。田舎道をひたすらこぐ。大月町の中心に女子大学の校庭で休憩して今日はどこに泊まるか考えるが、朝早くから走っても走っても大月。こんなはずではなかったのに気付く。このまま徳島へ二日間じゃ行けない。明日東京に帰らないと夏休みは後二日しかない。自分でも馬鹿な計算違いだ。本来なら明日東京へ帰るべきだが、自分でも後で馬鹿だと思うが性格が制御がきかない事で、この場合も一度計画した以上やるしかないと思ひ続行する決心をする。この調子だと次の富士吉田町で日没になるから宿は吉田と決め、午後六時頃吉田に着く。さて宿探しをするが、富士吉田高校の前を通りかかると校内が非常に賑やかなので校内に入って行くとテレビ番組の収録との事だ。当時人気番組の金語楼のジェスチャーと言う番組だと言う。この学校で泊れるか学生に聞くと、生徒会長をしている学生さんが来て事情を話すと、しばらくして生徒会長が剣道部が合宿しているので、話しをして段取

りまでしてくれて剣道部の生徒を紹介していただき、その生徒と町の銭湯へ案内されて、吉田の銭湯の水の冷たさにびっくり。富士山の地下水の為と思われる。夕食も学校でごちそうになり、夜寝る場所は教室の中に剣道部全員の布団が敷かれている三十人位か。蚊帳もかけられている。自分の布団は先生の隣で寝るように敷かれていた。疲れているのでぐっすり。あさはやく五時頃起きてそのまま出発するが隣の先生に枕元でお礼を言って静かに山中湖へ向かう。山中湖で道路端の水道で顔を洗い山中湖を過ぎ籠坂峠を越えて須走へ、更に下って御殿場へ、更に沼津へ。途中海水浴場で休憩して今夜の宿は沼津駅に行ってベンチで寝る事にする。金が余りないのでどこでも寝ることができる。よく蚊にさされなかったのが幸いだった。朝早く当然目が覚めるので、いつも朝は早く六時頃に出発する。ひたすら走る。この日は夜九時頃まで走って岡崎の国道沿いの古そうな旅館に夜も遅いので泊まる事にする。四百円と安くしてくれる。自転車で身なりで安くしてくれた感じだ。今日は何km走ってるのだろうか。沼津駅から岡崎の町まで。とにかく遅いので風呂入ってすぐ眠りに付く。明日は京都までの長い旅になる。たぶん二百km位走ることになる。途中難関の登り鈴鹿峠を越えなければならぬ。朝からひたすら漕ぐ。鈴鹿峠も通過し、夜も九時頃にやっと京都の町に到達したが、ちょっととした峠になっていて坂を下れば京都の町へ。そこに交番がありお巡りさんがライトを照らして呼んでいる。何かと思い近づくとお巡りさん夜遅いから交番に泊まっていきなさいと言ってくれる。ありがたかったが京都の斉藤様に寄る予定でしたので事情を話して先を急いだ。斉藤様はスナムラで一年先輩で嵐さんのお姉さんで連絡してくれていた関係で。だが斉藤家に着いた時間が十一時。外からだともう寝てる様なので失礼と思い安い旅館を探す。夜遅く素泊りで四百円と安く泊まれた。今日は朝早くから夜遅くまで走ったのでかなり疲れた。翌日は十時頃まで寝て、昼前に出発する。今日の目的地は淡路島のどこかで出発する。その前に京都名物のニシンそばがどんなものか食べてみたくて途中のそば屋で初めて食べるがさすがにうまいこの味が後々までニシンそばが大好物になる。昼飯も終わり、国道一号線を大阪通過し尼崎通過、西宮、神戸、更に明石港へ渡し舟で対岸の淡路島の岩屋に渡る。そこで夕刻になる。今夜はどこに泊まるか考えると、海水浴場に海の家があるので夜は使わないだろうから一軒の海の家にお願いすると御主人様はこんな所より我家に来なさいと一緒に自宅まで案内

してくれ風呂と食事をごちそうになり離れの室で寝る事が出来る。翌朝早めにお礼を言って出発する。淡路島を縦断する。途中洲本を通過して、福良港へ。ここからの渡し舟で対岸の鳴門へ昼頃には鳴門に着くとあとは一時間位で実家に着く。夏の暑い中過酷な五日間馬鹿げたチャリンコの旅で体調が最悪となり下痢が続く。二日休んで自転車は東京に送り、自分は汽車で会社に帰る。突然呼び出しあり。お説教と左遷となる。それからしばらくした秋頃会社の近くで小学と中学で同級生の柏木君と村上君とばったり。まさかの偶然に出合う。二人にこんな所で何しているのと聞くと、二人は俺達は大学に行っているとの事で近くに下宿をしているとの事。自分の会社にも近いのでその下宿家で他に何人も下宿してて大学へ行く家はこんな贅沢ができるんだ。この二人の実家も町の中で商売してて裕福な家庭だから。二人は柏木君は国学院大学、村上君は駒沢大学との事。彼等とは、高校は違っていたので四年ぶりに東京の地で偶然に合い、自分は高校より上に大学があるとは知らず、彼等と合って大学へ行く事も有りかと考えるようになる。その年の昭和三十七年暮頃には寮を出て戸越銀座商店街の布団屋の裏アパート二階三畳一間押し入れ無しトイレ共同に移り来年の受験準備する。引越には一年先輩の嵐さんにお世話になる。その他にもいろいろお世話になりますが、後に大学入学してから大変お世話になり一生恩返ししようと思う。(写真 家具のデパートスナムラ時代)



家具のデパートスナムラ食堂にて



家具のデパートスナムラ先輩 嵐 忠幸様



家具のデパートスナムラ時代



自転車で徳島に帰った時父親と



家具のスナムラ2年目の夏休み
自転車で徳島に帰った時の自転車
一番下の弟

六、大学時代

新年になりいよいよ大学に行く準備を考える。生活費や学費を稼ぐには、彼等二人のように仕送りは一切頼れないので、最初に学費の一番安い大学を選ぶ。第二に地理的にアルバイトのしやすい場所を選ぶ。それで選んだのが、千代田区三番町に在る二松学舎大学。池袋に在る、大東文化大学が共に年間の授業料が三万六千円と一番安いのでこれならアルバイトで仕送り無しで充分やっていけると判断した。最初に池袋駅に近い大東文化大学へ。立教大学も近くに在るが月謝高くパス。現地に行ってみると大学が今年より成増の畑の中に移転との張り紙有り。だけど新校舎をたずねる事に。そのまま成増駅へそれから歩いて農地の中を便利が悪く、交通の便も整ってなく大学に着いたがやたらと遠く感じられこの立地だとアルバイトに向いてないと感じたので、次は二松学舎大学へ千代田区で神田神保町の古本街に近く立地条件は申し分なし。九段上の靖国神社にほど近く都電も皇居方面から大学の前を通り靖国神社が終点となる。神保町方面から市ヶ谷駅方面にも靖国神社を経由している。立地条件は申し分無し。アルバイトも神田神保町あたりだといくらでもありそうで、二月頃二松学舎大学に受験する。その後受験当日は寒い雨の日だった。午前の筆記試験と午後の面接と続く。大学の受験は未知の世界。高校では野球ばかりで勉強はしてないし工業高校は専門授業が多い為受験に向いてない。筆記試験は自信無し、面接に期待する。面接官は三名の教授である。面接官に自分は徳島県立工業高校で手に職を付け就職したが、大学が有るとは知らなかった事など話し、人生をやり直したいので文学部を選んで来たので是非入学させてほしいと訴えた。結果は合格させてもらう。早速入学金。これも安く七万円との事。これだけは親に言っただけで負担をかける。その後の授業料と生活費は全てアルバイトでまかなっていかれるだろう。さてアルバイトを何にしようか考えた。新聞に新聞配達員の募集が目につく。条件が食事付きで給料も有りとする。荻窪駅近くの産経新聞である。学校からちよつと遠いが電車が一本で行けるからと思い決めた。この時代の配達員はほとんどが学生。朝五時頃から配達開始。五時前に新聞のトラックが店の前に落として行くがその音で起きる。一斉に四人位で支度が始まる。自分の持ち分を確保して出発だが、自分以外は自転

車で配達する。自分は区域が近場で荻窪駅周辺で密集してるので走りてくばる。ひも一本で一回百軒分を脇にかかえて、二百軒を担当する。百軒終わると帰って後百軒を済ますが一番早く終わるので朝食の準備は自分の担当となる。他の配達員も大学生ばかり亜細亜大学の二人と他一名だった。ご飯はおかみさんが炊いておいてくれるのでおかずだけ用意するが予算が決まっているので朝の早い豆腐屋でまかなう。皆んな二百軒位朝刊、夕刊も配達する。朝食が終わると急ぎ学校へ。荻窪駅から中央線で市ヶ谷駅で降りて学校まで歩く。授業が終るとすぐ帰り自転車で西荻窪駅まで夕刊紙を取りに行く。この担当も自分だ。量が多いから二人で行く。朝は店の前に配達トラックが落として行くが、夕刊は駅に電車が落として行く。店に帰ると皆んなが急いで自分達の分を確保して配達に飛び出す。朝刊と同様脇に百軒分を紐にて肩からかかえて走る。自分の区域は荻窪駅中心の住宅街で近くの為二百軒配達しても一番早く終る為夕食のおかずの支度も自分の担当になる。いつもは肉屋さんのあげ物で済ますが、時にはカレーが食べたくなるが肉を買う予算が無い為、自分の配達区域にホルモンを洗っているおぼさんがいるのを見てこれは安いと思いつけてもらう。カレーにたっぷり入れて用意した。久しぶりに肉が食べれた。ところが学生二人に文句を言われた。どうもホルモンの匂いがよくないらしい。自分は肉は何でもうまいのでいいと思ったが、一般の年輩の配達している人は、この人は店主の弟さんで九州から手伝いに来ている人は気にするなと言ってくれた。新聞配達は朝早いので夜に遊ぶことはできない。毎日休みもなく、大雨の日も大雪の日も大変朝は牛乳配達の人と出会う。牛乳配達も重いので大変そう。朝早く会うのは豆腐屋さんや牛乳配達の人ぐらいだ。区域の交番と映画館には無料で配達する。夕刊になると配達の間は時々お客様から靴下など土産をもらっていた。自分は新人だからなかったが、駅の裏の寿司屋さんからスカウトされた事もあったが、新聞配達はスタッフが抜けると後大変なので新人なので辞められないのでと、断り二年間続けた。この時寿司屋に行っていれば将来寿司屋になっていたかも。前にも寿司屋にスカウトされたが寿司に縁が。

入学してからは単位を一学年と二学年で教養課程は全部取って三学年と四学年はゼミの単位だけにする目標をたてる。三学年になると卒論の為のゼミの先生を決める事になる。四年卒業するまで卒論を作製するまで担当は学部長の飯塚友一

郎先生にお願いする。それまでの先生の印象は授業中は気むずかしそうな感じだ。学部長でもあり高齢であり後で知っていると超有名で立派な先生だった。当時七十歳を超えて江ノ島近くの腰越から通っていた。文化勲章も受賞する程の先生とは知らず、最初の日に先生に自分は登校しないで卒業論文の審査だけでお願いできますか。と言うと先生は思いがけず、河野君いいよ学校へ来てもそんなに頭に入らないからと言われた。びっくりだった。この言葉は忘れられない。

それから一年間に十日程しか登校しないで登校した日は昼時間に先生の室に行き、コーヒー入れて飲むかウイスキーも少し飲んだりして、今どんな事してるか報告と研究の話してアドバイスをいただき、先生の授業が始まると自分は帰るような状況を卒業論文提出するまで続いた。夏の時期は先生の家は江の島を眼下に眺める江の電の腰越駅裏の高台にある。夏になると友人大塚恒明君と伺う。彼も一年前から先生がゼミの先生だった。自分と大塚君は腰越の浜で海水浴。午後三時頃から夕方まで眼下の江の島や小動神社を眺めながら先生の話を聞いたり奥様の話も聞いて帰路につくが、卒論の提出日にフロシキ五キロ程の原稿を持って行くと、すぐ先生がそれを持って、神保町近くの学士会館に行くよと言っておそろそろついて行くと、大学の教授の学術会議の皆様は自分を、こう言う調査研究をやっていると紹介してくれました。なぜか自分をなにかに付けて心配してくれていた事がありがたく思っていました。その後二年間大学院で学び本を出版して卒業する。先生と奥様のこと知ってる範囲で紹介すると、友一郎先生は東大法科出て法学博士だが若い時は弁護士や新宿区の議員してたが、弁護士は人の尻ぬぐいでおもしろくないとの事で、文学博士として日大芸術学部を作って教鞭も取ってた様で古い名優宇野重吉や三木のり平、また女性小暮美千代、栗原小巻達を芸能界へ送り出されたようですが、栗原小巻さんは先生のこの家で生まれた。詳しくはよくわからんが、奥様は文学者超有名な坪内逍遙様の娘さんのくに様と言う。背が高くめずらしくザーマス言葉である。先生も芸能文学者の第一人者で我々が教わってる間に文化勲章を奥様と皇居で受賞する。その話しも先生の自宅で聞く。この自宅は元山荘で古くなっていて、建替えの予定があるが別棟の二重の塔に昔の勉強室があり友人の大塚君と二人で片付けをした思い出がある。卒業しても、毎年一度は腰越の自宅に挨拶に行く。と、河野君会社は大丈夫かと気遣ってくれました。先生が九十歳で亡くなる前に七里ヶ浜の病院に見舞いに行くと河野

君九十歳だよと言って治ったら祝杯をあげようと言ってお別れしました。それが最後だった。亡くなった後、奥様言うに退院した後も自宅で最後まで新聞の切抜きをしていたと言う。私の息子が自分が四十歳の二ヶ月前に生まれ名前を友一郎にと決めていたが、妻が姓名判断を見に行つて友一郎は良くないとの電話で仕方なく自分の名前を付けて晃一郎と命名する。恵まれた生涯の師となる。話しは少し戻して、三学年になった頃九段上の学校から九段下の神田神保町近くの印刷屋に面接して夜だけのアルバイトに変更する。寮もあり夕食付きである。ここも印刷屋で学生アルバイトの一年先輩の日大の田中清臣さんに教わりながら新しいアルバイトが始まる。この会社は新小岩に寮が有り食事もありとの事で決めた。学校が終わると歩いて九段下と神保町へと近い為、新聞配達より楽になったかな。田中さんとも一年間位ご一緒させてもらう。印刷の技術も覚えて、その後、同じ印刷技術のアルバイト先を文京区の五月商会と言う会社に移る。神田に近いので田中様とはその後も付き合いは続く。五月商会も住いも用意してくれ、社長様は生天目昭一と言って茨城出身で私の事は後々長く面倒見てくれる。大学と大学院卒業まで自分の都合に合わせて面倒見てくれた。仕事の忙しい時は自分が徹夜して手伝う。暇な時は自分は卒業の調査に出掛ける。大学院卒業になる時普通ならアルバイトを辞める時だが自分の後の技術者居なくなつて辞める訳にいかず、一年伸ばして後を育てて退社した。その間も就職しないで勉強したので恩返しのためりだった。五月商会でのアルバイトは長い。思い出は色々あるが、有名事件にからんだ。夏には軽井沢の別荘へ社長の家族を車の運転手として同行。ある年冬にテレビで大騒ぎになった赤軍派のテロ騒動の発端はこの別荘から始まる。五月商会の小さな一軒家の別荘に、使われていない冬に人の気配を管理者が気付き玄関に近づいたら内側から銃で発砲されて逃げてる間に上の大きな別荘浅間山荘に逃げ込んでからテレビで大騒ぎになる。後に社長の別荘の調査で自分達の指紋などで身元調査されるが自分については社長の説明で直接の調査はなかった。五月商会のアルバイトは長いので社員の皆さんと仲良くさせてもらい楽しい時だった。二十九歳になって、秋葉原の家電屋さんの品物の配送の仕事を受けて運送屋になるが、その後電子部品商社の配送していると社員二人と自分と三人で電子部品の商社、藤電子(株)を立ち上げ二年位やるが、配送だけでトラックを持って運送していた。有坂斗一さんをエコー電子にトラック持ち込みで配達専門で交渉する

とオーケとの事で紹介する。何ヶ月か経って正月に有坂氏とお礼の挨拶に行くと河野君も来てくれないかと机を用意していた。本気なのか。そこまで考えているなら自分も本気で考えるか。学校の研究も二十九歳で本も出し目ぼしは付けたので社員として入社する事にする。



はしがき

むかし源義経は、いはゆる腰越状を大江廣元に呈して、その衷情を訴えたが、私は今、腰越帖をもつて、古き友だちに、新しき友だちに、さては未だ見ぬ友だちに、身邊の消息を語らうとする。もとより、私は一介の學徒であつて

平は、まご
そこに私
し語つて成
雲あわたん
いかなる

う。例へ
か閑を得て
映して戦塵
士人の世に
なる配慮に
いと思ふ。
の下にて、

飯塚友一郎識

學生の頃
たがはて

4 バイクで走りまわった卒業論文

——徳島県探訪記——

河野 晃

昭和四十一年のことであった。二松学舎大学の学部四年で卒業論文のテーマ決定に際し、同じやるなら郷里に関するものが調査に便利だと考えて、「徳島県の人形芝居」ときめた。有名な阿波の人形浄瑠璃の歴史の探査である。七月のはじめから実地調査にはいる。まず昔の人形座をたずねて、古いバイクを持ち出して走らせた。行先きは那賀郡木沢村の共楽座で、坂州座ともいう。徳島市の自宅から古バイクでは五時間以上もかゝる奥地であった。共楽座に関係のあった人を聞き求めて、古老の石田さんをたずねる。高齢の石田さんは耳が遠く、娘さんの通訳でやっとのことで子供の頃からの記憶の聞き書をとる。その話の中で村の八幡神社境内に舞台があることをはじめて知った。行って見ると、茅葺屋根で立派な太夫座を備えた人形舞台であった。この時は私はまだ舞台を特に調査する気でもなく、とにかく写真だけ撮って、急いで次の目的地の拝宮座に向かった。

拝宮座は、木沢村のやや下流で上那賀町大字拝宮にある。座の責任者の吉田栄一氏をたずね、聞き書をしたが、この村の白人神社にも舞台があるという。柱には文化三年と墨で書いてあるということなのである。この分だと他の村々の神社にも舞台があるのではないかと思った。それから那賀川に沿って下る村々で神社を聞いて、近ければちよっと立寄ってみると必ず舞台がある。

驚きながら那賀川を下り切って、阿南市川口町から日和佐町にバイクを向け、同町の赤松という村に出た。この赤松神社に立寄ると、ここにも舞台があつて、それが小学校の仮校会に使われていた。小学校の先生と話をかわしていると、この舞台は回り舞台になっていると言つて、中へ案内して下さつたが、これにはびっくりした。徳島県の片田舎に回り舞台があるとは思つてもみなかった。舞台全景の写真を撮つたが、残念なのは机が並べてあつたのでその回り舞台を撮らなかつたことである。というのは、翌年の夏、再調査に行くとき新しい集会所に建替え中で、舞台は完全に解体されていた。実に惜しいことをしたものだ。村人に向つて、まだそんなにいたんでもなかつたのになぜ建替えたのか、徳島県ではたいへん珍しい舞台であつたのにと話したものである。次いで日和佐町北河内登りの山神社の舞台を写真に撮り、日も暮れたので夜道を急いで家に帰り着いた時はもう夜も更けていた。

その後数日は人形座をたずねまわつていたが、どうも舞台のことが気にかかる。思案にあまつたので、すぐ上京し、指導教授飯塚友一郎先生に委細を報告して御指導を仰いだ。そして舞台調査に専念することにした。徳島県にそんなに舞台があることはまだ知られていないということである。私が以前から聞いていたのは人形浄瑠璃はたんぼなどに掛け小屋をすることであつたが、それは専門の人形芝居だったので、村の人のする人形芝居や歌舞伎の舞台が別にあつたわけである。これはすばらしい発見になりそうだ、実に楽しかつた。

そこで徳島県全体の調査計画を立てた。まず南の海岸線を高知県境の宍喰町竹ヶ島から徳島市内へ向かつて調査する。次是那賀川沿いに奥的那賀郡木頭村北川から徳島市内へ向い、その次は桑野川沿い、勝浦川沿い、吉野川沿いと、県南地域から県北地域へ河川を中心にして移つて行くプランである。

飯塚先生から特に重要性を指示された写真撮影の諸用具をはじめ、実測するための折たたみのスケール、巻尺、

電灯などを揃える。リュックに飯盒、米など自炊用具と野宿用の蚊帳をつめ込む。その頃は胃腸が弱かったので、漢方薬のゲンノシヨウコも入れる。これを飯盒飯のあとでせんじて飲むのである。

こうして本格的調査行は七月十五日から開始した。古バイクは途中でだめになってしまったので汽車とバスのほかは歩くのである。夜は海岸の林や神社の拝殿に蚊帳を吊って寝る。夏の夜の稲光の中で小さくなったりもしたものである。十八日に阿南市新野町常政の功德神社の舞台にたどり着いた。四日間でやっとここまでである。

歩きの調査は時間の無駄が多いと痛感したので、いったん切り上げて家に帰った。新しいバイクを買って、十二日から阿南市の続きを再開である。今度は快調に調査が進んだ。もともと農村舞台についてなんの知識もなかった私であるから、調査につれて何もかも珍しかった。多くの舞台には上手の方に太夫座が付設されており、舞台前面には蔀張ぶちまというものが設けられていたりする。阿南市福井町大宮の大宮八幡神社の舞台には、客席は舞台の正面の傾斜を利用して何段もの石積み土壇が作ってある。同市長生町明谷八幡神社の舞台では、前面に雨戸がしまっていて内部は暗くてよく見えないので、とにかくフラッシュで撮って帰ったが、現像してみると床に回り舞台の切っであるのが写っている。驚いて急いで確かめに再訪したが、結局この舞台が徳島県唯一の現存の回り舞台となったのである。

那賀川沿いは、前に木沢村に行ったが、それをさらに奥地の木頭村から調べるので、新しいバイクでも四時間から五時間もかかる道なのである。険しい道もあり、狭い道路に材木運搬のトラックが多くて危険な思いもたびたびである。幸に私の兄の会社が木頭村和無田にあり、また隣接する上那賀町平谷に兄嫁の実家があり、この二カ所を拠点とすることができて、非常に好都合であった。夜は家人に舞台の所在地を教してもらって地図にしるしをつけ、何かと話を聞く。夜が明けると早立ちで各部落へバイクを走らせる。

正直に言つてここへ来るまでは舞台を見つけるのは困難ではないかと思つていた。それほど辺鄙なところなのである。ところが、各部落ごとに必ず舞台があつて、次から次へと発見する。思つてもみない程の密度に驚きの連続であつた。どこでも実測と撮影を先きにして、それから近所の古老をたずねて聞き込みをする。芝居好きの老人が、話が尽きないから泊つていかないと云つてくれたこともある。変つた舞台や珍しいものを見出した時は調査の楽しみが一段と湧いてくる。

木頭村が終ると上那賀町へ、そして木沢村へと進めたが、バイクも通れないような所にある部落が多い。道端に置き放して木馬道きんまどうを歩いて行つたり、峰一つ越えてまるで登山のようなことも度々あつて、一日に四カ所ぐらの調査であつたが、那賀郡全域に五十二カ所の舞台の現存がわかつた。さらに那賀川と桑野川沿いの阿南市の地域にはいる。舞台数はますますふえる。前に調査した海岸方面と合わせて五〇カ所を得たので、那賀郡との合計は一〇〇を越えた。ここで帰宅する。

その後、勝浦郡の調査にはいり、十八カ所を数えた。なかでももつとも奥の村である八重地の舞台は古くて、屋根は茅葺で太夫座も立派で非常に広い舞台であつた。ところが翌年再調査に行くと舞台はなくて礎石だけ残つている。焼失したのである。前に記した赤松の回り舞台の解体と言ひこと言ひ、舞台の保存という問題を考えさせられた。この舞台は焼け残つた棟札で明治六年の建築とわかつた。この勝浦郡には久国座という人形芝居が今も残つていて、昔から芸能の盛んな所だつたということである。

次は徳島市域の村落であるが、南の山間部に数カ所見つけただけで、北方になると見られなくなる。さらに吉野川沿いはまるで発見できない。県北地域は北方きたがたと総称されているが、そこにはありそうにないと見切りをつけて卒業論文の調査を終ることとした。

七月十五日からはじめて約一カ月の調査行であった。現存舞台一四七棟の発見である。撮った写真が七〇〇枚近く、全部自分で現像し引伸して焼付けた。これを整理した大量の写真を主とし、聞書を添えて、舞台の分布と人形芝居の残存の状況を報告する文を作り、学部の卒業論文として提出した。昭和四十二年一月十日というその提出日が、今も忘れられない。

私は大学院修士課程に進んだ。そして二年間またもバイクで舞台調査を続けた。何と言っても前年の調査は発見の喜びに夢中になっていて、不十分なことが多い。調査洩れの舞台がありそうで不安である。北方も念を入れねばならない。個々の舞台についても、建築年代のことや人形系歌舞伎系の区別など確かめねばならないことが多い。

この度は厳冬下の調査行もあって、防寒衣類で完全武装して出掛けたり、凍りついた路でスリップして転んでけがをしたこともある。途中でエンジンが故障して困ったこともあれば、徒歩道で犬に追っかけられて閉口もした。建築年代は古老も記憶せず棟札もわからないという所が多いが、判明した限りでは明治初年のものが多い。文化三年をはじめとして江戸時代の落書のある柱や壁板があっても、明治期の改築の時に記念に残して使われた古材である。それは、江戸期にも舞台があったという貴重な資料である。落書の大部分は人形座の座名・太夫名・人形役者名である。地芝居の歌舞伎もしたので、たいてい平舞台であるが、そこに人形芝居を設置するのであって、もともと人形芝居のために建てられたものが多いと考えられる。本格的な舟底型の人形舞台は徳島市八多町犬飼の五王神社の舞台と三好郡三好町昼間の奥の森神社の舞台に見られる。

こうして、昭和四十四年一月十日に提出した修士課程卒業論文には、徳島市三棟、名東郡一棟、名西郡二棟、小松島市七棟、阿南市六九棟、那賀郡八八棟、勝浦郡一九棟、海部郡一六棟、三好郡一棟、板野郡二棟、合計二

○六棟の現存舞台と、廃絶舞台三四棟との調査報告することができた。その後も四十六年まで随時調査を行なったが、同じ舞台に二度三度確かめに行くことが多くて、追加舞台は現存二棟、廃絶一棟であった。

ふりかえってみると、六年間に県内をしばしまでバイクで走りまわったことになるが、それでもまだ見落している舞台があることであろう。当初は全部自分が発見したつもりでいい気になっていたが、実は郷土史家の方などが発見され写真も記録も取っておられて、ただ未発表に過ぎなかったものがいくつもあることも知るようになった。調査期間中にバイクで東京へ三度往復したが、道々の舞台に気軽に立寄るのも楽しく、岐阜県では特に有名な舞台を見てまわって有益であった。ともかく徳島県の分布調査は一段落がついたと思う。今後は多くの人の手で遺構を探り、またひとつひとつの舞台について精査されることを期待したい。